学 位 論 文 要 旨

技能実習生の数の増加、滞日期間の延長、移行職種の拡大とともに、（来日直後の）彼/彼女らに対する日本語教育はさらに注目を浴び、焦眉の課題になった。しかし、現行の技能実習制度については、国際貢献の美名の下で、技能実習生を安価な労働力として扱う実態があること、（介護職以外）社会参加に必要な日本語の力は制度上必須なものとされていないことなど、様々な点からの批判が存在する。現在、技能実習生向けの公的な日本語教育支援は来日後の 2 ヶ月間の講習しかないが、この講習で日本語教育のみに時間が費やされるわけではないし、講習での日本語と作業現場での日本語が相違しているという指摘もいくつかある。10 年（以上）滞日可能の技能実習生に対して、2 ヶ月間の講習があまりにも足りず、延長すべきではないかと思われる一方が、同時に、限られた講習時間の中で彼/彼女らに何を教えるべきかということも再検討しなければならない。

本研究は、以上の問題意識を持ちながら、指示が多く、かつ危険性を伴う鉄骨工場をフィールドとし、そこでの技能実習生に向けられた日本人同僚の発話における日本語表現の特徴を明らかにした。具体的には、言語の表現面と運用面から、1）特有な言葉、2）文型、3）文末表現の特徴、4）スピーチレベルシフト、5）非文末「ですね」といった 5 つの方面について、研究を進めた。その結果は次の通りである。

言語の表現面において、主に、特有な言葉と文型に注目し、研究を進めた。第 3 章では、特有な言葉について、名詞は一般的な初級教育で取り上げられている語の約 3 割しか鉄骨工場で出現しなかった。動詞、形容詞に関しては、JLPT の N3〜N5 の 7 割以上が現場で使われていることが明らかになった。第 4 章では、文型について、①技能実習生向けの講習用教材であるものの、現場における頻用される文型項目の重複率は半分もないこと、②講習用教材では取り上げられているが、現場では一回も使用されていないものがあること、③講習用教材では取り扱われていないが、現場ではよく使用されているものがあることが明らかになった。

言語の運用面においては、主に、文末表現の特徴、スピーチレベルシフト及び非文末「ですね」に注目し、研究を進めた。第 5 章では、文末表現の特徴について、①現場の発話には、言いさしが半数近くあり、よく使われているのに対し、講習用教材では、言い切りが主導的な地位を占めていること、②現場では、普通体を主な基調としているのに対し、講習用教材では、丁寧体を主な使用文体としていること、③現場では、「動詞等の∅形」の使用率は 4 分の 1 未満に対し、講習用教材では動詞等の「∅形」の使用率は半数近くあること、④現場では、相応の縮約形があるものについては、縮約形を使うのが一般的であるのに対し、講習用教材では、ほとんどの場合に、相応の縮約形があったとしても、元の形そのままで使われていることが明らかになった。第 6 章では、スピーチレベルシフトについ

て、①朝礼、会議、終業式は丁寧体を基調としているのに対し、現場の発話場面は普通体を基調としていること、②先行研究ではまだ言及されていないが、丁寧体基調場面におけるダウンシフトとして、「強い口ぶりで、念を押す時」、「職業規則を明示する時」、普通体基調場面におけるアップシフトとして、「実例を挙げる時」、「相手に同意・共感を示す時」、「1 つの作業が終了時の合図」、「説明を諦める時」にもスピーチレベルシフトが生じられること、③機能は、構造標識、談話標識、待遇標識と心的距離の伸縮の 4 つに分類できること、④スピーチレベルシフトには一回性のものと連続性のものがあり、場面によって現れ方が異なっていることが明らかになった。第 7 章では、非文末「ですね」について、①出現位置の分布については、品詞の観点から、9 分類に分けられること、文の構成の観点から、「∅」成分、助詞の代用成分、省略部の代用成分の 3 つにまとめられること、②場面ごとの使用率については、丁寧体基調場面における非文末「ですね」の使用は普通体基調場面のそれより、5 倍近く高いこと、③機能は、主に、「注目表示」、「聞き手への配慮」と「情報検索」といった 3 つを果たしているが、2 つの機能が相補的に果たされていることもありうることが明らかになった。

以上の研究結果を踏まえ、本研究は、1）話せなければならない項目、2）できるだけ話せたほうがいい項目、3）聞き取れなければならない項目、4）できるだけ聞き取れたほうがいい項目、5）知っておいたほうがいい項目の 5 つに分けて、鉄骨工場で働く技能実習生向けの日本語教育について提言した。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 161 号	氏　名	張学盼
論文題目	鉄骨工場の作業現場における日本語表現の特徴――技能実習生に向けられた日本語母語話者の発話の分析から――		

（論文審査概要）

本研究は、指示が多く、かつ危険性を伴う鉄骨工場をフィールドとし、中国人技能実習生に向けられた日本人同僚の発話を分析することから、現場の日本語表現が持つ特徴を明らかにしている。具体的には、言語の表現面と運用面から、1）特有な言葉、2）文型、3）文末表現の特徴、4）スピーチレベルシフト、5）非文末「ですね」といった５つの方面について検討している。

1）特有な言葉については、名詞は一般的な初級教育で取り上げられている語の約３割しか鉄骨工場で出現しなかったことや、動詞、形容詞に関しては、JLPT の N3～N5 の７割以上が現場で使われていることが明らかにされた。

2）文型については、技能実習生向けの講習用教材と、現場において頻用される文型項目の重複率は半分もないことや、講習用教材では取り上げられていても、現場では一回も使用されていないものがあること、反対に、講習用教材では取り扱われていないが、現場ではよく使用されているものがあることが明らかにされた。

3）文末表現の特徴については、現場の発話では言いさしが半数近くあるのに対して講習用教材では言い切りが主導的な地位を占めていること、現場では普通体が基調であるのに対して講習用教材では丁寧体が主であること、現場では縮約形を使うのが一般的であるのに対し、講習用教材では、基本的には縮約せずに使われていることが明らかにされた。

4）スピーチレベルシフトについては、丁寧体基調場面におけるダウンシフトならびに普通体基調場面におけるアップシフトの中に、先行研究では言及のないケースを発見した。また、スピーチレベルシフトには一回性のものと連続性のものとがあり、場面によって現れ方が異なっていることも明らかにされた。

5）非文末「ですね」については、出現位置の分布、場面ごとの使用率、機能について検討された。

本論文について、外部審査委員からは、予備審査時にくらべ一貫性において大きな改善があったことや、先行研究レビューによる技能実習生対象の日本語教育における課題や流れについても、より明確に提示されていることに関して高く評価するコメントがあった。また、問題として取り上げるべき点は無いということも伝えられた。

本論文についての審査委員会の評価は、次の通りである。

１．創造性

従来の説を十分に理解したうえで、新規性のあるデータ（鉄骨工場での発話）を分析したことにより、新しい発見が複数述べられている。技能実習生に対する日本語教育研究分野においての貢献は明確である。以上より、創造性の点においては、極めて優れている。

２．論理性

論証手続きは十分に妥当なものとなっており、説得力を持つ議論が組み上げられている。問題提起の部分がやや重い（重すぎる）という課題はあるものの、全体としては、論理性の点においても、極めて優れている。

3．厳格性
先行研究が十分に渉猟され検討されている。厳格性の点においても、極めて優れている。

4．発展性
本研究において明らかになった事柄は相応のインパクトを持つものであり、鉄骨工場ではない現場で働く技能実習生への日本語教育研究においても、波及していく可能性がある。発展性の点においても、極めて優れている。

以上より、審査委員会は、本論文を全体として極めて優れているものとして評価し、最終試験を合と判定した。

論文審査結果
(合)・否

審査委員　主　査　（氏 名）山本 孝夫

（氏 名）石井 由理

（氏 名）高橋俊章

（氏 名）有元光彦

（氏 名）